

<今回>302回目 2021年9月20(月祭日)15時~18時 第9会議室  
読書は10冊目「失われた九州王朝」再読 p348、第2のテーマ より

<前回>301回目(21-9-10)出席者 7名  
資料(21-09-10-1)前回のまとめ(清水)  
(21-09-10-2)百済三史の引用人名表(清水)

A 報告 新型コロナの動静について、情報交換した。個々に判断することが大切である。

干支について10干12支を60組で循環するのは、組み合わせがないものが60組あるということ。例えば甲と丑はない。裏干支が存在するが使用された形跡はない。干支について各自の理解の仕方を話した。

B 資料 2)は昨年資料20-01-21として榛葉氏から提供された百済三史の補注である。その1ページ目を再度コピーした。表の4段目に百済本記の倭人名と百済側が理解した名前が列記されているが、書紀編集者には国内伝承者に該当者が見いだせなくて「語なまりて不詳」と連呼している。

継体崩年の辛亥説(継体25年、西暦531年)と甲寅説(継体28年、西暦534年)の差異を再確認した。国内伝承の甲寅年で年次の矛盾はなくなるが、継体の崩の直前に皇太子(安閑)に譲位してその日のうちに亡くなるというのは如何にも作文めいている(公文書偽造)。

C 読書 346頁12行目 論点を整理しよう

- 1) 「天王」の表記について、前田本の書写者が「天王」とあったのを「天皇」と書き誤って即座に気が付き「天皇」の「皇」字を消して「王」に書き改めたのは周知のことで、書写原本通りに訂正したことを表している。前田本は平安後期の古本とされ、前田本に「天王」とあったことは確かである。
- 2) これに対して「岩波古典文学大系、日本書紀上」471pには「百済新撰」には大王などと書かれていたのだからと推定しているのは恣意的であると指摘した。
- 3) 「天王」「天皇」の表記は東アジアの他の夷蛮王朝表記の前例からみても5~6世紀の日本に出現するのは何の不思議もない。
- 5) 同様の理由で日本列島内においても「天皇」称号が近畿大和の天皇家にのみにゆるされなければならないという理由はない。いわゆる天皇家に先行する使用例は存在する。
- 6) 百済新撰、百済本記に「天王」、「天皇」をめぐって出現する人名群は大和朝廷内の伝承人名と異質である。先行する天皇家とは隋書倭国伝、旧唐書日本伝の記載内容からみても、当然九州王朝以外ではない。
- 7) いわゆる磐井の反乱、継体没年と3年のずれ。第1テーマの或る本の記載、継体28年甲寅に崩じたという記事は大和朝廷(日本国内)伝承として正しいと思われる。これには3年のずれは存在しない、安閑紀の始めの記載に合致する。

次回日程 2021-10-8日(金) 15時から18時 かながわ労働プラザ 第8会議室  
—10-29(金) 15時から18時 かながわ労働プラザ 第8会議室  
—11-8(月) 15時から18時 かながわ労働プラザ 第9会議室  
—11-26(金) 15時から18時 かながわ労働プラザ 第9会議室